

徳次郎石の採石と利用の歴史

池田 貞夫 (宇都宮市文化財調査員)

1. 徳次郎石の特徴

宇都宮市の中心部から北西に約11km、徳次郎町西部3集落(西根・田中・門前)の山中に、通称「石山」と呼ばれる山があり、この山を中心に採石された凝灰岩を、一般に「徳次郎石」と呼んでいる。徳次郎石は「大谷石」同様、火山活動によって噴出した碎屑物が水中に堆積し、軽石凝灰岩になったと考えられているが、大谷石とは異なる特徴を有している。

それは、①石の木目が細かいこと。②色が白又はやや青味がかっていること。③石に粘りがあり、細工しやすいこと。④ミソと呼ばれる粘土化した軽石が、ほとんど見られないことなどである。このため、徳次郎石を利用した古い石蔵の中には、築後100年以上を経過しているにもかかわらず、今なお美しい石肌と風格を保っている石蔵を多く見かける。また、地域の人々によって奉納された神社の石造物や、民間信仰によって建てられた石塔・石仏類を見ても、徳次郎石独特の木目の美しさが生きている。

2. 徳次郎石の採石場

徳次郎石を採石した「石山」と呼ばれる場所は、男抱山(標高338m)の北西に位置し、また富屋地区の主峰半蔵山(標高502m)の南東斜面に当たる。西隣は新里町に接しており、標高300m付近に位置している。採石場跡は石山の東斜面と、南北に伸びる尾根に沿って連続して見られ、個々の採石場跡を数えると優に40カ所を超えるが、分布区域として見ると5カ所ほどになる(図1)。

この区域の中で、大量にかつ長期にわたり採石された場所が、西部3集落51戸が共有している石山である。共有石山は大きく2カ所に分かれ、西根場が40a(徳次郎町字鶏沢3616番地10)(写真1-1)、田中場が51a(徳次郎町字山越入3480番地1)の面積を有し、総面積は91aである。なお田中場は、南と北に採石場跡が見られる(写真1-2、1-3)。このほか門前伝法寺の西方に、2カ所の採石場跡が分布している。その1つは門前秋葉神社が祭られている山頂及び中腹(写真1-4)で、もう1つは雁行山(通称がんこ岩のある山)の山頂付近一帯(写真1-5)である。

採石場跡に行くには、下田中、上田中、門前の3ルートがあり、それぞれの山道入口から西進して山を登り詰めると、最終的には共有石山に通じる。これら採石場跡に一歩足を踏み入れると、その昔石工職人たちが手掘りで岩を削り、石を細工した痕跡が、今も生々しく残っている。

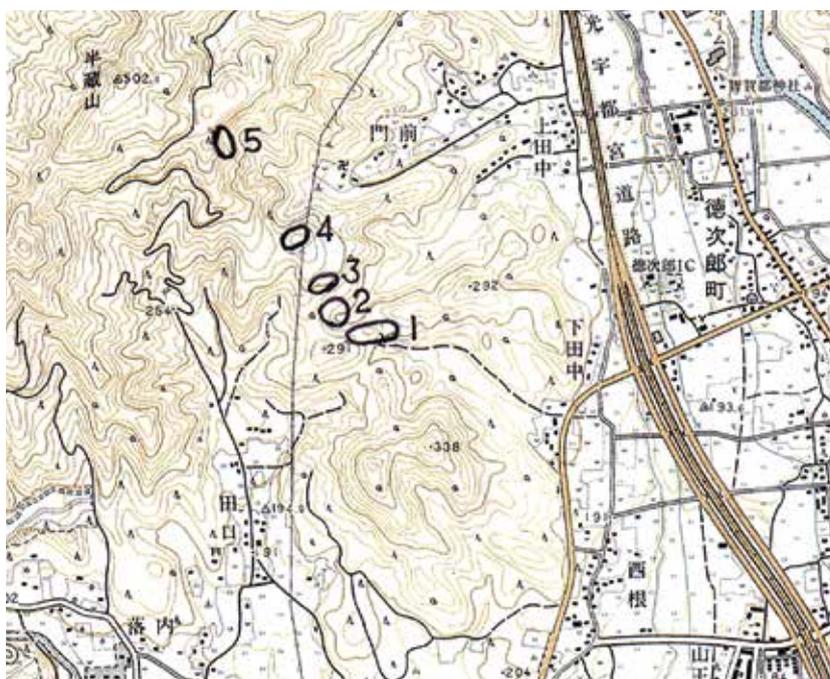


図1. 徳次郎石採石場跡分布区域図(1~5)



写真1-1 共有石山西根場



写真1-2 共有石山田中場(南)



写真1-3 共有石山田中場(北)



写真1-4 秋葉神社山頂及び中腹



写真1-5 雁行山の山頂付近

3. 採石の歴史

(1) 伝承と推測による採石の起源

徳次郎石がいつごろから採石されたかについては、採石場近くに南北朝時代創建の伝法寺があり、付近に採石場跡があることから、当時、建物の礎石に使われた可能性が伝えられている。また、上田中には亀井六郎茂清などの墓と称せられる、高さ90cmの五輪塔（石造物）2基があり、当該五輪塔の大きさや形式から見て、近世以前に建造された可能性が高い。

(2) 史料に基づく採石の起源

徳次郎石を利用した石造物として、年号が刻まれた最古のものは、徳次郎町下町薬師堂の五智如来石塔で寛文4年（1664）、続いて大網町高麗神社石灯籠が寛文8年（1668）、門前伝法寺名号塔が延宝3年（1675）、門前共同墓地庚申塔が延宝8年（1680）などとなっている。したがって、江戸時代初期の寛文年間ごろには、採石・加工が始まったものと考えられる。

(3) 採石の隆盛

江戸時代中期以降、徳次郎石の採石が盛んになったことを示す史料として、天保年間（1830-）ごろ作成された「日光道中略記七」（国立公文書館蔵）の中に、次の記述がある。「徳次郎三宿の産物 にんじん牛蒡葱干瓢ならひに白き石（徳次郎石）を出せり 其質軟脆にして堅実ならず 宇都宮宿小山宿などにて堂社又ハ土蔵の屋に用ゆるものなり」[左雁行山伝法寺山よりきり出す 其職人ハ西根田中門前の三村に住すという]。

天保年間頃、徳次郎石は日光道中徳次郎宿の産物として、名声を博していたことが窺える。特に宇都宮宿や小山宿などのお堂や社殿、土蔵の屋根に用いられたとしている。また、伝法寺付近の山々から採石を行ったのは、西根、田中、門前の西部3集落に住む人々であったことも伝えている。

昭和期の戦後に編集された記録や著書の中に、「石材の採掘は200年以前享保年間（1726-）ごろ石碑を作りしもの、今なお墓地に存在せり」（共有地石山ノ沿革）や、「享保年間（1726-）より採掘し、今日に及んでいる」（福田操著富屋村史）と記述している。

(4) 明治時代以降の採石と加工

明治30年4月、石山を共有する地権者が「共有組合」を組織し、一定の税金を支払えば石山から自由に採石できる規約を定めた。それによれば石工税金は、年間1人に付き組合員は金1円60銭、丁場持ちは金3円とした。また、他組・他村の石工は年間金4円、丁場持ちは金5円であった。

その後、この組合規約に基づき、組合員及び家族らは農業をしながら、採石の仕事にも従事した。明治時代以降今日まで、徳次郎町内で採石に従事した人がいる家数は、約40戸を数える。特に西部3集落の家々は、いわゆる農間渡世と呼ばれる働き方で、農閑期を利用して石山に入り、採石・加工業務に従事した。大正時代には石材加工を専門とする石工が増え、とりわけ日光街道沿いの上・中・下徳次郎には、専門の職人が住みついた。また、大正12年には石工らによって、共有石山田中場（北）に、山の神や石の神を祭る石祠が建立されており、当時の石工たちの祈りや繁栄ぶりが窺える。

昭和時代初期には、石材の加工、販売を専門とする石工の組合「徳次郎石材同業組合」が組織された。昭和15年の同石材同業組合「改正相場表」によると、宮石（石祠）の加工、販売価格は、1尺柱付きが金8円、9寸が7円50銭、8寸が4円80銭、地蔵荒石1人立ちが55銭としている。鳥居については4尺ものが金32円、6尺ものが70円、1丈ものが308円であった。灯籠は3尺もの1対が金16円、5尺ものが47円60銭、6尺ものは71円50銭と定めていた。なお、翌昭和16年になると、組合名を「野州徳次郎石材採掘加工組合」に改め、相場表（協定価格）も同様に示している。戦後は「富屋石工組合」として再出発し、需要が伸びた積み石蔵（大谷石、徳次郎石、その他の石）などの建設に力を入れるようになった。

昭和20年代以降、石蔵の材料として大谷石が主流を占めるようになると、徳次郎石の注文は大幅に減少したが、それでも徳次郎石がもつ特性を求める需要は維持され、採石に従事する石工は7人ほどいた。昭和44年4月作成の「共有石山組合」総会資料によると、当時の採石の料金は年間、平面積坪当たり、手掘りで2,700円、機械掘りで5,000円～10,000円と定めており、石工はこれに基づいて料金を支払い採石を行った。個人の石工として最後まで採石、加工を続けたのは下田中の池田武夫で、栃木県知事から採石業務管理者に認定されるなど、知識、技術に優れていたが、時代の波を受け平成2年、山を降りた。

徳次郎石の採石、加工業は、江戸時代以来、個人個人が担ってきたが、昭和39年から49年の11年間、「日光石材株式会社」が企業として初めて採石を行った。採石場は西根場共有地の一部60坪で、機械掘りにより本格的な生産に乗り出した。採石場までの取り付け道路を会社が整備し、採石した石はトラックで輸送した。製品は「日光石」の銘柄で、主に京阪神地方に出荷され、高級石材として門柱の張り石や室内装飾品などに用いられた。しかし、良質の石材が底を尽いたこともあり、事業は打ち切られた。

4. 採石と運搬の方法

徳次郎石の採石地は、山の尾根やその斜面に沿った岩場であることから、採石は一般に露天の岩を垂直に掘り下げていく「平場切り」が行われた。平場切りは表面の凹凸を平らにした後、縦横に一定の線を引き、線上にまさ切りという道具で、2寸ほど切り込みを入れ、さらに鶴嘴を使って6寸ほど溝を下げる。その後矢じめを使って、側面に等間隔に矢を刺す。こうすると石が離れ、厚さ6寸×縦1尺×横3尺の石を切り出すことができた。なお、奥行きのある巨大な岩場では「平場切り」の前に、水平に掘り進む「垣根掘り」も行われた。石山で荒取りした後は里に送られ、石祠や鳥居、灯籠、蔵の屋根瓦、張り石、積み石などに細工された。石の運搬方法は、採石場からは人が背負ったり、山の斜面に小道を作って竹や丸太を敷いて動かしたり、時にはそりを利用した。山の中腹からは馬や馬車に載せて運んだ。馬は当時、石を運搬する上で欠かせない存在であり、このため共有石山西根場には明治5年に生駒神社が、同40年には勝善神が建立されている。

明治32年石材輸送のため、戸祭・新里間に人車鉄道が開通し、4年後の36年にはその支線として富屋線が開通し、徳次郎駅が設置された。新里本線では採石した石や物資の輸送が行われたが、富屋線は乗客の輸送を目的に、鉄道会社の営業成績を向上させようとして整備されたもので、徳次郎駅は採石場から遠く離れた場所に設けられており、当該路線で石材が運ばれることはなかった。

5. 徳次郎石と信仰

徳次郎石は江戸時代以降、明治、大正、昭和時代を通じて、民間信仰の神道、仏教関係の石造物に数多く利用された。特に、信仰心が深く根付いていた江戸時代には、社寺やお堂、道端などに石造物が建立された。種類としては、神社関係では石祠、鳥居、手水舎水盤、狛犬、石灯籠などがあり、石仏・石塔類では月待日待塔、馬供養塔、山岳信仰塔、念仏供養塔、地蔵・観音像、道標・道祖神、法篋印塔など多岐に渡る。

ちなみに徳次郎町を中心とする富屋区域内において、徳次郎石を用いて建立された石造物は約300基あるが、時代を区分すると江戸時代のもものが53%、明治時代のもものが27%を占める。種類を分けると、石灯籠152基、石祠90基、鳥居42対、馬頭観音46基、馬力神30基、十九夜供養塔22基、勝善神20基、庚申塔16基などとなる。これらの石造物は社寺や集落、講などによって建立されたもので、個人が屋敷内に設けた石造物を加えると、その数は大幅に増える。



写真2. 徳次郎石を使った石仏



写真3. 徳次郎石を使った石蔵

6. 徳次郎石と石蔵

江戸時代後半ごろになると、徳次郎石が石蔵に利用されるようになる。従来板倉であった建物の屋根に、徳次郎石が石瓦として使われ、やがて外壁に張り石として使われるようになった。徳次郎町近辺で最古の石蔵は同町門前の大房寿男家の蔵で嘉永2年（1849）、続いて上横倉町半田武家のものが嘉永3年（1850）、岡村悦男家のものが嘉永7年（1854）となっており、この時期から名主や豪農を中心に石蔵の建設が進んだ。明治時代から大正時代にかけて、徳次郎石を使った石蔵は最盛期を迎えており、徳次郎町を中心とする富屋区域内の棟数は、100棟余を数える。江戸時代後期から大正時代中頃にかけては、主に外壁に薄い石板を張り、釘で留める張り石構法が用いられ、大正時代の終わり頃になると、一定の寸法の石を積み上げる積み石構法が主流となった。なお、徳次郎石を利用した石蔵の建設は、昭和20年代以降、大谷石の大量生産と普及に伴い、その棟数は大幅に減少したが、それでも昭和40年代ごろまで続いた。

7. 徳次郎石と彫刻

徳次郎石の特性として木目が細かく、地肌が美しいこと、石に粘りがあり細工しやすいことなどから、早くから石仏や狛犬などに細工されてきたが、江戸時代後期以降造られた石蔵の出窓の周辺には、吉祥や長寿を表す彫刻が見られる。彫刻の図柄としては「鶴亀（日の出の鶴・波の亀）」「松竹梅」「高砂」「恵比寿大黒」などで、さらにこれらを組み合わせたものもある。石彫刻を手掛けた徳次郎の代表的な人物として、中町の入江兼吉、徳一郎、文男の親子3代にわたる石工がいる。特に兼吉、徳一郎は、地元石蔵に優れた作品を残している。また、門前の岩本十九寿も後世に作品を残している。

8. 徳次郎石の今後

徳次郎石を採石した場所は、現在採石は行われてはいないが、遺構として往時の姿を今に留めている。一方、徳次郎石を利用した石祠や石灯籠、石仏、供養塔などの石造物は、今も住民の心のよりどころになっており、石蔵については風格のある建造物として美しい町並を形成している。今日、徳次郎石が有している歴史、文化、美術、産業など多彩な遺産を再評価し、遺産を次世代に引き継ぐべき時を迎えている。

そのためにも今後、採石場跡の遺構の調査やマップの作成、建造物や石造物などの諸物件の詳細調査、記録などを行う必要がある。その上に立って、徳次郎石の持つ多様な魅力を積極的に発信し、地域の活性化を図っていくことが重要である。

主要文献

- 「日光道中略記」天保年間・国立公文書館蔵
- 共有石山組合「石山組合保存資料」1897～1974
- 池田貞夫「富屋の石造文化財」2007